

## ヨーロッパ経済の歴史的空間：文明の記憶, 空間の 類型

著者	渡辺 尚
雑誌名	海外事情研究
巻	40
号	1
ページ	53-70
発行年	2012-09-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1113/00000063/">http://id.nii.ac.jp/1113/00000063/</a>

# ヨーロッパ経済の歴史的空間

## — 文明の記憶，空間の類型 —

渡 辺 尚

### 1 「ヨーロッパ」<sup>1)</sup>とは何か

1991年のソ連消滅をもたらした複合的要因のなかで、その2年前のベルリンの壁の崩壊が決定的な意義を持つことはよく知られている。28年間にわたり東西ベルリンを隔ててきた壁が構築されたのは、1961年8月である。同年10月に西ドイツはトルコと協定を結び、トルコ人労働者の受け入れを始めた。壁の構築で流入がとまった東ドイツからの労働力の代替が必要だったからである。

当初、かれらの滞独期間が2年に制約され、家族入国も許されなかった。しかし条件が次第に緩み、出生地主義のおかげでドイツ国籍の子どもが増えていった。一定期間の養育義務を果たした両親にもドイツ国籍が与えられ、出産率も高いため、トルコ系ドイツ人の数は増える一方で、2010年現在8175万人の総人口の5～10%を占めると推定されている。また、トルコの貿易の4割以上を対EU貿易が占め、国別ではドイツが最大の貿易相手国である。半世紀も前からトルコは経済面でドイツと離れがたく結びついているのだ。しかし、トルコはドイツからそれにふさわしい待遇を受けてきただろうか。とくにギリシャへの厚遇と較べてトルコへのあからさまな冷遇ぶりは、奇異な印象を与えるほどである。

二次大戦後トルコとギリシャはともに、1948年OEEC(後のOECD)の原加盟国に、1949年CE(ヨーロッパ評議会)の事実上の原加盟国に、1952年NATO(1949年設立)の加盟国になった。1958年のEEC発足直後に加盟申請をしたのも、ギリシャとほぼ同時である。ギリシャに1年遅れだけの1963年に、トルコも加盟候補国となった。しかし、1960年代後半を境としてEC/EUによる差別が始まった。ギリシャが飛び地であるにも拘わらず1981年にEC加盟が認められ、2001年にはユーロ圏駆け込み加盟さえ許されたのに対して、トルコは1987年EC加盟申請のやり直しを余儀なくされたのである。ようやく1999年に加盟候補国となったものの、加盟交渉開始は2005

1) 「ヨーロッパ」という表記は、オランダ語の *Europa* (エーローバ) に由来する。江戸時代に出発でオランダ商館との貿易取引の通訳に当たった通詞が、「ヨーローバ」と聞きなしたからであろう。ちなみに新井白石『西洋紀聞』(1715年)での表記は、「エウロバ」である。

年にずれこみ、しかも交渉の進展ははかばかしくない。

そればかりでない。ギリシャ、トルコ両国関係に横たわるキプロス問題が、様相をいっそう複雑にしている。1960年にイギリスからの独立を果たしたキプロスは、2010年現在110万人の人口の8割弱がギリシャ系、2割弱がトルコ系である。国土の4割弱を占める北部のトルコ系地域が1983年、北キプロス・トルコ共和国として分離したが、承認したのはトルコだけである。首都ニコシアは南北を隔てる境界で分断され、国連軍の監視下に置かれている。このような状況下で、統治権が及ぶ範囲が国土の6割強にとどまる南部のキプロス共和国が、国際法上は全土を代表するとして、アジアの一国であるにも拘わらず2004年EUに加盟し、2008年にユーロ圏加盟さえ果たしたのである。EUはなぜこのような紛争の地の加盟承認を急いだのか。トルコのEU加盟交渉開始の直前であったことを思えば、これをいっそう難しくすることを狙ったとしか考えられない。

EUはギリシャにかくも甘く、トルコにかくも冷たい。その根本的理由が、そもそもトルコは「ヨーロッパ」なのかという、「ヨーロッパ人」の疑念にあることはいうまでもない。それでは、何が「ヨーロッパ」なのか。元フランス大統領ジスカル・デスタンが「トルコはヨーロッパでない。トルコがEUに入ったらEUはおしまいだ」と言っていたとき、かれはその理由を挙げようとしなかった<sup>2)</sup>。

意外にも1958年発効のローマ条約以来、2009年発効の現行リスボン条約にいたるまで、EEC/EC/EU条約に「ヨーロッパ」の定義は見いだせない。「ヨーロッパ人」にとり「ヨーロッパ」はあらためて定義をくだすまでもない自明の観念か、さもなければ定義を問うこと自体が禁句であるかのようである。ここに、「ヨーロッパ人」の自己認識の危うさが露呈していると言えよう<sup>3)</sup>。

2) ビレンヌは一次大戦中に、「トルコ人は、10及び11世紀に、人種から言うならばモンゴル系であるにもかかわらず、完全にバグダードのアラブ人のセム文明に同化されてしまっている」と書いた。アンリ・ビレンヌ著・佐々木克巳訳『ヨーロッパの歴史』創文社、1991年[原著出版1936年、執筆1917～18年]、423ページ。ところが1990年代にデイヴィスは、「トルコ人の大部分は、人種的にコーカソイドのように考えられるが、言語は明らかに非ヨーロッパ系である」と述べている。ノーマン・デイヴィス著・別宮貞徳訳『ヨーロッパ 古代』共同通信社、2000年[原著出版1996年]、389ページ。「ヨーロッパ人」のトルコ認識のいい加減さといったら。

3) 大戦間期にドーソンは、「ヨーロッパ文明とは・・・抽象的概念などではない。それはまったく具体的な一つの社会的有機体であり、・・・現実身近に存在する」と述べる一方で、「文化的見地からみれば、ヨーロッパの統一とはヨーロッパ史の出発点ではなく、いまだ到達されていない究極目的である」ともいい、「ヨーロッパ」が現実態か理念態か決めかねているかのようである。C.ドーソン著・野口啓祐・草深武・熊倉庸介訳『ヨーロッパの形成 - ヨーロッパ統一史序説 -』創文社、1988年[原著出版1932年]、IX、3ページ。デイヴィスも、「ヨーロッパ」は、容易には到達できない理想で、すべてのよきヨーロッパ人の努力目標だった」という。前掲書、42ページ。これは循環論法でないのか？二次大戦直後フェーブルはいう。「私は単に、一定の時代に、それも最近築かれた、異論の余地も否定のしようもないひとつの歴史的統一体を、ヨーロッパと呼ぶ」リュシアン・フェーブル著・長谷川輝夫訳『ヨーロッパとは何か？第二次大戦直後の連続講義から』刀水書房、2008年[原著出版は1999年]、35ページ。まるで問うこと自体を禁じているかのようだ。

アジアのキプロス、南アメリカのフランス領海外県 DOM、アフリカにおけるスペインの飛び地、これらすべてが EU 領域であることは、たしかに「ヨーロッパ」が単なる地理的観念でないことを示唆する<sup>4)</sup>。それでは、「ヨーロッパ」とは何かという問いがあらためて発せられることになる。この問いは二つに分けて考える必要があろう。「ヨーロッパ人」が自らをどのように認識しているか、および、わたくしたちが「ヨーロッパ」をどのように認識することに意味があるのか、この二つにである。この二重の問題を考察するに当たり、以下三つの論点が方法上の手がかりを与えてくれるであろう。

第一は、地名と人名の関係である。両者の相互移行が容易に生じることは、いまでは大陸名とされている「ヨーロッパ」が、人名に由来することから示される。そこで、「ヨーロッパ人」とは「ヨーロッパに住む民」を呼ぶのか、それとも、「ヨーロッパ」とは「ヨーロッパ人が住む土地」を呼ぶのかが問われる。前者ならば土地の風土特性が重視され、後者ならば住民の人種特性が重視される。固有名詞に潜む土地と住民の二重性は、社会集団の形質が居住地の風土的・歴史的条件にどれほど規定されるのかという問いを誘発する。「北アメリカでは、英語を話すプロテスタントからなる〈ヨーロッパ〉ができ・・・南アフリカでオランダ語を用いるユグノーの〈ヨーロッパ〉があらわれ・・・」というような、「ヨーロッパ」の拡大解釈に「ヨーロッパ人」は走りがちだが<sup>5)</sup>、これは「ヨーロッパ」を人種名とすることを無自覚に前提としている。しかも、これが人種を自然的・歴史的環境から切り離して、人種決定論（白色・ゲルマン・アーリア人種至上主義）に向かう可能性を孕んでいることに、かれらは無頓着である。

第二は、土地名であれ人種名であれ「ヨーロッパ」という名称が、いつから現在使われている意味になったのかという問いである。これをもう少し正確に表現するならば、今日「ヨーロッパ文明」の主たる担い手と自ら任じている人種（むしろ地族というべきか）が、いつ、なぜ、自らを「ヨーロッパ人」と名乗るようになったのかと、

4) 「ヨーロッパの境界は、まさしくヨーロッパ文明の境界ということになる。」「ヨーロッパとは、このように地理的でなく歴史的な形成体、すなわち政治的かつ文化的な形成体なのである。」フェーブル、前掲書、132、138 ページ。

5) クシシトフ・ボミアン著・松村剛訳『[増補] ヨーロッパとは何か』平凡社、2002 年 [原著出版 1990 年]、194 ページ。ただし、ボミアンは、「いまやヨーロッパ世界はラテン・キリスト教世界と合致しなくなった。西欧化がトルコまで及ぶとき、ヨーロッパ世界はキリスト教世界とも重ならなくなるであろう」ともいっている。同上書、201 ページ。かれがトルコを「ヨーロッパ」の一員になりうる国と観ていることは興味深いが、この論法でゆくと、日本も「ヨーロッパ」に組み入れられる可能性を持つことになる。これは「ヨーロッパ」概念のインフレイションではないのか。ちなみに、フェーブルも次のようにいっている。「このような彼ら [アメリカ人] に対してヨーロッパ人の資格を与えるのを、われわれの間にためらう者は一人もいない。」前掲書、138 ページ。「われわれ」とはだれなのか？

言いかえることもできよう。

第三は、「ヨーロッパ」は初めから自称だったのか、それとも初めは他称だったのかという問いである。かりに「ヨーロッパ」が初めは他称だったとすれば、どのような経緯で自称に変わったのかが重要な論点となる。このことは、「アジア」という地名を考えれば解ることである。「アジア」はもともと古代ギリシャ人がアナトリアもしくは小アジアと呼ばれる地域を指した、アシエーに由来する。後述するように、西紀前4世紀にアレクサンドロスの版図がインドまで広がったため、「アジア」概念もアナトリアから東に大きく広がり、ユーラシア大陸の、ヨーロッパ半島を除く本体の総称となった。もともとギリシャ人による他称であったものを、近代になって「アジア人」が自称として受け入れたのである。

他称が自称化する現象に注目するのは、「非ヨーロッパ人」が自らの立場から「ヨーロッパ」を解釈する自由を持つことを示唆するからである。「ヨーロッパ」とは何かと問うことは、「ヨーロッパ人」の自己認識を問うだけでなく、いわんやそれに無批判に従うことでなく、わたくしたちが主体的に「ヨーロッパ」をどのように認識するかという、自らに対する能動的な問いかけでもあるのだ。

## 2 「ヨーロッパ」はいつから「ヨーロッパ」になったか

### 2-1 史書にみるエウローペー

「ヨーロッパ」という呼称の語源が、ギリシャ神話に出てくるエウローペー

*Ευρώπη* というフェニキアの王女の名に由来することはよく知られている<sup>6)</sup>。そこでまず、古代ギリシャにおけるエウローペーの用語法について検討しよう。

文学では、ホメーロスが『アポローンへの讃歌』のなかで、「人間どもは、豊かなペロポンネーソスを治める者たちも、またエウローペーやさらに海の流に囲まれた島々を治める者も皆・・・」と詠っているのが、ギリシャ文学史上初出とされる<sup>7)</sup>。ホメーロスは西紀前8世紀ごろの人といわれているので、遅くともそのころまでに、ペロポンネーソス半島より北の地域の一部が、エウローペーと呼ばれるようになったことが推定される。

歴史学ではヘロドトス(485~425BC?)の『歴史』が注目に値する。ここにはエウローペーが頻出し、しかも随所でその具体的な説明が行われているからである。「ヨー

6) 「名前は伝わらないが、なにがしかのギリシア人が、フェニキアのテュロスへ侵入し、王の娘エウロペを掠め去ったというのである。このギリシア人というのは、クレタ人であったかと思われるが・・・」ヘロドトス著・松平千秋訳『歴史』岩波文庫、2007年、上、10ページ。

7) ホメーロス著・逸身喜一郎・片山英男訳『四つのギリシャ神話 - 『ホメーロス讃歌』より - 』岩波文庫、1985年、『アポローンへの讃歌』の一節、77-78ページ。訳注247)、201ページ。

ロバが周囲を河海でめぐらされているかどうかは何人も知らず、その名称をどこから得たのか、その命名者がたれであるかも明らかでない。われわれとしては僅かにこの地方の名をテュロスの女エウロペから得たことをいい得るのみである。さればヨーロッパも他の二大陸と同様、以前は無名であったに相違ない。ともかくエウロペなる女がアジアの出身であることは明らかで、この女が今日ギリシア人がヨーロッパと称している土地へきたことはなく、せいぜいフェニキアからクレタ、クレタからリュキア[小アジア南部の地中海沿いの地域]までしかいっていないことも明白である。」<sup>8)</sup>「イストロス河[ドーナウ河]はケルト人の国にあるピュレネの町から発し、ヨーロッパを真ん中から二つに割って流れている。・・・イストロス河はヨーロッパ全土を貫流して最後に黒海にそそぐが、その河口のイストリア[ドブルジャ地方のイステレ]はミレトスの移民の住む町である。」<sup>9)</sup>「それというのもイストロス河はヨーロッパ全土を貫流する河であるからで、ヨーロッパの住民の中ではキュネタイ人について最西部に住むケルト人の国に発し、全ヨーロッパを貫流しスキュティアの脇腹に注いでいるのである。」<sup>10)</sup>

以上の記述は二つの点で興味深い。第一に、エウローペーがアジア生まれであることが明確に認識されていること、第二に、ギリシャ人の植民市建設の進展とともに、フェニキア クレタ リュキア ミレトス ドーナウ河口という、地中海東部から黒海にいたる人および文化の流れが浮かびあがってくることである。ヘロドトスは、後述するミレトス学派のヘカタイオスのヨーロッパ大陸観を受け継いでおり、そのミレトスは小アジアの西南端でクレテ海に面し、リュキアからほど遠からぬ地である。

ところが、ヘロドトスより一世代若い同時代人トゥキュディデス(460/455～399/396BC)は、『歴史』のなかで次のように述べている。「さて[トラキア人の]オドリュサイ族の帝国[今日のブルガリアに相当]は、その広さ海岸線ではアブデラのポリスから黒海のイストロス河口まで及んでいた。・・・イオニア湾から黒海沿岸までのヨーロッパ大陸に分布する諸種族のうちで財貨の収入や他の面での繁栄によって、オドリュサイ族の王国は最も強大なものであった。ただし軍事力や兵員数においては、スキュタイ王国よりも劣り、大差があった。その点ではヨーロッパの諸民族が比肩できないばかりか、全スキュタイ人が協調して結束した場合には、これと一民族対一民族で対抗しうるものはアジアにも存在しない。」<sup>11)</sup>ここでは、ヘラスの北部に隣接する、ドー

8) ヘロドトス、前掲書、中、35 ページ。

9) 同上書、上、209～210 ページ。

10) 同上書、中、38 ページ。

11) トウキュディデス著・藤縄謙三訳『歴史 1』京都大学学術出版会、2000 年、246 ページ。ちなみにヘロドトスもトラキア人を紹介しており、後述のアリストテレスのエウローペー人の記述と符合する。前掲書、中、134 ページ。



ナウ河右岸域のバルカン半島中部がエウローペーとされており、ケルト人の住む全ドーナウ流域をエウローペーと呼んだヘロドトスの大陸観念よりだいぶ限定されている。

いずれにしても、エウローペーとアジアとの境界がヘレスポントス (チャナッカレ＝ダーダネルス海峡) であったこと、したがって黒海・マルマラ海西岸域からエウローペーが始まるとみられていたことは疑いを入れない<sup>12)</sup>。

時代がくだって、ヘラスがペロポネソス戦争という内部抗争で体力を消耗し、すでに衰勢に傾いていた西紀前4世紀のエウローペーの位置づけについて、何よりも参考になるのがアリストテレス (384～322BC) の『政治学』である。かれはまず、「非ギリシア人はギリシア人よりも、またアジア人はヨーロッパ人よりも、性格が本来隷属的であるために、何ら反感をもたずに独裁的な支配を甘受する」と述べる<sup>13)</sup>。「また」以下の記述は、「非ギリシア人のなかでアジア人はヨーロッパ人よりも」の意味であり、ギリシア人はヨーロッパ人に含まれない。なぜなら、かれはより明確に次のように後述しているからである。「寒冷地に住む諸民族、とくにヨーロッパ地方に住む諸民族は気概に富んでいるが、思考と技術は乏しいうらみがある。それゆえ彼らは民族のうちでも比較的自由でありつづける一方で、国家を組織できず、近隣の民族を支配することができない。他方アジア地方の諸民族は思考と技術の精神はあるけれども、気概に乏しい。それゆえ彼らはつねに支配され、隷属化されている。しかし、ギリシア民族は、地理上両者の中間を占めているように、気質の上でも、両者の要素 - 気概と思考 - を分け持っている。それゆえ彼らは自由でありつづけ、もっともすぐれた国家組織のもとにあるのである。」<sup>14)</sup>

アリストテレスはギリシャの北方に広がる地域をエウローペーと呼ぶが、その範囲を具体的に記述してはいない。厄介なことに、かれは別の個所で「スキュレティオン湾とラメトス湾のあいだにあるヨーロッパ側の突出部もイタリアの名を得た」とも述べている<sup>15)</sup>。スキュレティオン湾はイオニア海に面し、ラメトス湾はティレニア海に面しており、両者を結ぶ線からの突出部はイタリア半島南部のいわば靴の爪先にあたる部分である。ここはギリシア人が多数の植民都市を建設したため、ローマ時代に「大ギリシャ」 *magna graecia* と呼ばれた地域である。ここはヘラスからみて西北西に

12) 「アジアとヨーロッパを結んでヘレスポントスの架橋作業が行われた」ヘロドトス、前掲書、下、38 ページ。トゥキディデスの同時代人クセノポン (430/425～355BC) の記述「軍を率いてヘレスポントスを渡ってエウロペに入った」も、これと一致する。クセノポン著・根本英世訳『ギリシャ史1』京都大学学術出版会、1998年、132 ページ。

13) アリストテレス著・牛田徳子訳『政治学』京都大学学術出版会、2001年、160 ページ。『政治学』中公クラシックス版 (田中美知太郎・北嶋美雪・尼ヶ崎徳一・松居正俊・津村寛二訳、2009年) の当該箇所も参照した。

14) 牛田訳、同上書、361 ページ。田中他訳では「思考」を「知能」と訳している。321～322 ページ。この方が分かりやすいが、「ヨーロッパ人」に対する評価がいっそう厳しくなる。

15) 牛田訳、同上書、369～370 ページ。

あたるので、バルカン半島中部からイオニア海を横切りイタリア半島最南部までエウローペーが伸びているとアリストテレスがみていたと考えれば、トゥキュディデスとの食違いが避けられる。

ともあれ、アリストテレスの記述で重視されるべきことは、彼がヘラスを中心にして、東南方向に広がるアシエー（リュビエー [アフリカ] も含まれる）と西北方向に広がるエウローペーとからなる三面世界像を描き出していること、すなわち、エウローペーをヘラスより北（および西）の外界、異邦人（バルパロイ）の地とみなしていたこと、エウローペーの地名がヘレネス（ギリシャ人）による他称であったことである<sup>16)</sup>。

エウローペーを地理的名称として使ったヘロドトスと比べ、アリストテレスの用語法に価値判断がこめられていることが、新しい問題を誘発する。注記のように、エウローペーが「西」を意味する東方語に由来するならば<sup>17)</sup>、「西」という方位は、文明の中心地である東方世界からみた蛮地の隠喩であったかもしれないからだ。そうであれば、西紀前5世紀にエーゲ海文明の中心に就いたヘラスからすれば、いまや旧文明の中心地（アシエー、リュビエー）と対称の位置にある西方と北方こそ、エウローペーと呼ばれるべきことになる。方位とは空間観念にとどまらず文化観念でもあり、古代地中海世界で「西」は、蔑称の色合いを帯びていたのかもしれない。

しかし、ヘラスとエウローペーを峻別する世界観は、アリストテレスの時代をもって終わったようである。かれの時代、ヘラスに接する北部はマケドニアとトラキアの領域であった。父がマケドニア王アミュンタス三世の侍医であり、その孫アレクサンドロスの家庭教師を務めたアリストテレスが、マケドニアをエウローペーに含めていたかどうか定かでない<sup>18)</sup>。しかし、少なくともトラキアを「ヨーロッパ地方」の一部とみていたことは、ほぼ確かであろう<sup>19)</sup>。

16) 「ギリシアはヨーロッパを考案した。けれども、盛りの時代にあったギリシア世界はヨーロッパ世界ではなかった。」フェーブル、前掲書、63 ページ。

17) 「アジアあるいはイオニア方言のアシエとは、東の国、日が昇る国のことであつた。西の陸地、それはヨーロッパのことである。エウロペ、ドーリア方言のエウロパとは、フェニキア人がエレブ、オレブ、エロブと呼ぶもの、ギリシア語のエレボス、アラビア語のガルブ [Maghreb] であり、日が暮れる国、太陽が波間に沈む時に日が黄昏の闇に暮れるのが見える国のことである。「エウロペとは西の国あるいは闇の国である」とギリシア人辞典編纂者が言うところである。」フェーブル、前掲書、56 ページ。デイヴィス、前掲書、I 23, 501 ページも参照。

18) 牛田訳、前掲書、「解説」432-439 ページを参照。

19) 「かくしてセソストリスは大陸を席卷し、アジアからヨーロッパに渡り、スキュタイ人およびトラキア人をも征服するに至った・・・」ヘロドトス、前掲書、上、256 ページ。「諸島嶼およびテッサリアに至るまでのヨーロッパの住民」同、405 ページ。テッサリアはペロポネソスとマケドニアに挟まれた地域なので、マケドニアもヨーロッパに入ることになる。「もしこの民族[トラキア人]が一人によって統治されるか、全民族が結束するかしたならば、おそらく向かうところ敵なく、世界中の民族の中で、桁外れの最強を誇ることができるはずである。けれどもそれは彼らにはとてもできぬ相談であって、実現の見込みはない。それだからこそこの民族は弱



アリストテレスの世界像の転換をもたらしたのは、どうやらアレクサンドロス (356~323BC) による帝国建設だったようである。これによりまず大きく変わったのは、エウローペー概念でなくアシエー概念である。アレクサンドロス帝国の版図はペルシャ帝国の版図とほぼ重なりあう。ヘレスポントスとタナイス (ドン) 河より西側の地域でアレクサンドロス帝国に属したのは、マケドニア、トラキア、ヘラス (スパルタを除く) だけである。しかし、それまでヘラスからエウローペーと呼ばれていた北方地域 (マケドニア、トラキア) を中核とするアレクサンドロス帝国に、いまやヘラス自体が従属することにより、ヘラスがそれまでの中心性を失い、エウローペーの一部となった。そのエウローペーに西紀前1世紀ごろまでに、ヒスパニアにいたるまでの地中海北岸全域が含まれるようになっていた<sup>20)</sup>。

## 2-2 地図史にみるエウローペー (エウローパ)

古代ギリシャの史書におけるエウローペーの用語法をざっと検討したところで、つぎに地図史のなかのエウローペーを一瞥しよう。

初めて世界地図を描いたのはミレトスのアナクシマンドロス *Anaximandros* (610 ころ~540BC) といわれる。これを継いだのが同じミレトスのヘカタイオス *Hekataios* (6世紀前半~5世紀後半BC) であった。かれが西紀前500年ごろ作成した地図の再製 (ラテン語表示) は、世界が北を天にした円盤として描かれ、海洋に囲まれた円形の大地が地中海、黒海、カスピ海によって南北に二分され、北のエウローパと南のアシア (リビア[アフリカ]を含む) の両大陸が向きあう構図である<sup>21)</sup>。ヘラスは中心点に

いのである。」同、中、134 ページ。「トロイア戦争に先立って、ミュシア人とテウクロイ人とかボスポロス海峡を渡ってヨーロッパに侵入し、トラキアの住民をことごとく征服し・・・」同、下、31 ページ。「ヨーロッパで徴用した部隊も加算しなければならない。・・・まずトラキアおよびトラキアに近接する諸島のギリシア人の提供した船数は・・・歩兵部隊については、トラキア人、・・・マケドニア人、・・・」同、下、138-139 ページ。また、「ブリュギア人はマケドニア人とともにヨーロッパに居住していた間は、ブリゲス人と呼ばれていたが・・・」同、下、63 ページ。以上のヘロドトスからの引用例から、アリストテレスのエウローペー人論がヘロドトスのトラキア人論とかなり重なることが判る。さらにまた、マケドニアもヘラスからエウローペーの一部と見られていたらしいことも浮かびあがる。

- 20) 「彼 [アレクサンドロス] の生まれた日に二羽の鷲が一日中ずっと彼の父の家の屋根の上に居座っていたのであり、それは二重の帝国、即ちエウロパとアシアの支配権を先取りしていたのである。」「ヒスパニアはちょうどそれがエウロパの境域を閉じるように・・・アフリカとガリアとの間に位置し・・・」ボンベウス・トログス (19~2 BC 執筆)/ユニアヌス・ユスティヌス抄録 (AD 3 世紀)・合阪學訳『地中海世界史』京都大学学術出版会、1998 年、210、458 ページ。188 ページに挿入の地図 C 「アレクサンドロス帝国」も参照。「アシアとカドモスの妹 [エウローパ] という二つの大陸を分け、その間を流れる川 [タナイス=ドン]」オウィディウス (43BC~AD 17)・木村健治訳『悲しみの歌/黒海からの手紙』京都大学学術出版会、1998 年、432 ページ。ちなみに、同時代に書かれたカエサル『ガリア戦記』に、エウローパは出てこない。
- 21) ヴィンセント・ヴァーガ+アメリカ議会図書館著・川成洋+太田直也+太田美智子訳『地図の歴史』東洋書林、2009 年 [原著出版 2007 年]、33-36 ページ。

置かれているが、その説明はない。ここではエウローパが地理的な大陸観念として表示されており、前述のようにヘロドトスがこの世界観を受け継いで、歴史家としての記録を残したのである。

後代にもっとも強い影響を及ぼしたのは、ローマ帝国アレクサンドリアの天文・地理学者クラウディオス・プトレマイオス *Klaudios Ptolemaios* (AD 80/100 ごろ～170 ごろ) であった。彼の著書『地理学』*Geographia* はギリシャ・ローマ時代から伝わった現存する唯一の地図帳である。プトレマイオス地図は地球を球体とみて北を天にした円錐図法により、イベリア半島からインドにいたる既知世界を、とくにエウローパを驚くほど正確に表している。世界地図におけるエウローパ、アジア、アフリカ三大陸観を確立した『地理学』は、9 世紀末にアラビア語に翻訳され、13 世紀末にビザンツ帝国でギリシャ語写本が発見された。イスラーム世界とビザンツ帝国で写本として継承された『地理学』は、15 世紀初めにカトリック世界にもたらされてラテン語に翻訳され (*Cosmographia*)、1470 年代にボローニャで印刷刊行された。以後 16 世紀末まで、標準地図としての権威を保ち続けたのである<sup>22)</sup>。

1569 年メルカトル *Gerardus Mercator* (1512～94) が、正角円筒図法により羅針盤航海に適した、舵角一定の航路線を直線で表す『世界地図帳』*Atlas* を作成して、世界地図の歴史は新しい時代を迎えた<sup>23)</sup>。

他方で、トゥキュディデスやアリストテレスに連なる、トラキアを中心とする地域を狭義のエウローパー (エウローパ) とする観念が消えたわけでもなさそうである。それを示唆するのが、ローマ帝国の行政管区編成である。4 世紀にトラキア大管区 *Dioecesis Thraciarum* の属州 *Provincia* に、コンスタンティノポリスを擁するエウローパ *Europa* があり、これと向かい合うアナトリアの南半分 *Dioecesis Asiana* の属州に *Asia* があった。5 世紀末～6 世紀初には、ギリシャ語表記となり、*Thraciarum* が *Thrakike* に、*Europa* が *Europe* に、*Asiana* が *Asiane* にそれぞれ変わった<sup>24)</sup>。こうしてみれば、コンスタンティノポリス、現在のイスタンブール周辺の地域こそ歴史的に固

22) A.H. ロビンソン・R.D. セール・J.L. モリソン著・永井信夫訳『地図学の基礎』、第 4 版、地図情報センター、1984 年 [原著出版 1978 年]、17-18 ページ。ヴァーガ他、前掲書、46-49、243-244 ページ。応地利明『地図は語る「世界地図」の誕生』日本経済新聞社、2007 年、174-175、185 ページ。ちなみに、わたくしは 2011 年 9 月 3 日～12 月 18 日に東京足立区の石洞美術館で開かれたヒンドゥー美術展に展示された、ミュンスター『世界誌』所載のプトレマイオス「世界図」*Ptolemaische general tafel begreifend die halbe Kugel der Welde* (1550 年) を観る機会に恵まれた。地名がラテン語表記で記入され、大陸名として *ASIA*、*AFRICA* が赤色大文字で記入されているが、なぜかエウローパは *EU* が抜け落ちて *ROPA* だけになっていた。

23) ロビンソン他、前掲書、62 ページ。ヴァーガ他、前掲書、276-277 ページ。応地、前掲書、185 ページ。

24) Richard J.A. Talbert (Ed.), *Barrington Atlas of the Greek and Roman World*, Princeton University Press, 2000, 100-102 ページ。

有の「ヨーロッパ」というべきである。この地域が15世紀末以降現在にいたるまでトルコに属していることは、「ヨーロッパ人」の自己認識への疑問を新たにしているものである。

### 2-3 中世の「ローマ世界」と「キリスト教世界」

ローマ帝国を継いだ西方世界は、「ローマ世界」*romania*<sup>25)</sup> または「キリスト教世界」*christianitas, ecclesia*<sup>26)</sup> と自称していた。カロリング朝時代に「エウローパ」が使われることもあったようだが、一時的現象に終わったようである<sup>27)</sup>。

それではブトレマイオスが再発見される15世紀初期にいたるまで、キリスト教世界で世界地図 *mappa mundi* が作られなかったかという、けっしてそうでない。古代ギリシャ人の三大陸観念が、キリスト教神学の世界像形成に援用されて、これはい

- 
- 25) ピレンヌはローマニアを重視している。「ローマによって征服された地域の全体を言いあらわす「ローマ世界 *Romania*」という言葉があらわれたのは4世紀のことである。」「[7世紀]ローマ世界 *Romania* は・・・全体としては依然存続していた・・・ローマ世界 *Romania* は惰性的に生き延びた。」「ラテン語は生き残った。そしてローマ世界 *Romania* の統一を8世紀に入っても支えていたものは、この言葉だった。」「アンリ・ピレンヌ著・増田四郎監修中村宏・佐々木克巳訳『ヨーロッパ世界の誕生 - マホメットとシャルルマーニュ -』創文社、1960年[原著出版1937年]、4、46、195ページ。ボミアンも同様の記述をしている。「8世紀初頭には「ローマ世界」(ローマニア)の新旧の住民の統合は、基本的に、ほぼどこでも完了した。」「前掲書、33ページ。フェーブルもまた。「日常生活の小さな枠組みを超えて思い描くことができたこの文化的総体を指すのに、ローマ帝国 *imperium romanum* という言葉、あるいはローマ文化圏 *Romania* という観念で充分だった。」「前掲書、81ページ。
- 26) デイヴィスはいう。「イスラム教の出現は、「キリスト教世界」という新しい、固く結びついた世界の境界線を設定し、・・・」「ヨーロッパを誕生させたのは、コンスタンティヌス以降の四百年間だった。この時期には、イスラム教というスクリーンの背後でまとまりつつあった「キリスト教世界」・・・という共同体を「ヨーロッパ」という名で呼んだ者はまだいなかった。」「前掲書、I 449、486ページ。ピレンヌも次のように述べている。「9世紀に・・・存在したのはキリスト教世界だけである。」「『ヨーロッパの歴史』99ページ。「教会のひろまっている範囲 *ecclesia* と空間的に相敵いあう広大なキリスト教共同体が成立した。そしてこのキリスト教世界 *ecclesia* がローマの方に顔を向けていたのは言うまでもない・・・。」同『ヨーロッパ世界の誕生』407ページ。フェーブルもいう。「[中世の西方は]キリスト教世界というヨーロッパであって、自らヨーロッパとは名乗らない。」「ヨーロッパという名称が存在する。・・・しかし、まずヘレニズムと呼ばれ、次いでローマ帝国と呼ばれ、さらにはキリスト教世界と呼ばれた現実が存在するのである。」「異民族が徐々にローマ化し、キリスト教化する一方で、旧ローマ人が著しく異民族化する。・・・最終的に一つの共通文明が生まれる。・・・その名を尋ねると、ヨーロッパとは答えず、キリスト教世界と答えた。」「前掲書、180、135、139ページ。
- 27) 「カール大帝時代・・・ヨーロッパ人と呼ばれたら仰天しただろう・・・彼らのうちのもっとも学識のある者にとって、ヨーロッパという語はおそらく、地理上のラベルという意味での、地理的な意味しか持っていなかった。」「フェーブル、前掲書、134ページ。「古代の呼称「エウローパ」が復活したのは、カール大帝の宮廷である。カロリング朝の王は、世界の中で自分たちが統治する地域を表す名称を必要としていた。異教の国々、ビザンティン、全体としてのキリスト教世界とは異なる地域として位置づけるためである。したがってこの「最初のヨーロッパ」という西欧の概念は長く残ることなく、カール大帝の死後には消えてしまった。」「デイヴィス、前掲書、II 23ページ。「ボワティエの戦い[732年]に参加したキリスト教徒側の戦士を指すのに、当時のある文[イシドルス・バケンシス]にたしかにエウロペエンセス *europaeenses* という語があらわれているとはいえ、カロリング朝の版図を「ヨーロッパ」と呼ぶことはできない。」「ボミアン、前掲書、40ページ。

いわゆる T&O 地図となって図像化した。T&O 地図とは、大地を大洋に囲まれた円盤とみなし、東を天にして円盤陸地を T 字により三分割し、上（東）をアジア、右下（南）をアフリカ、左下（北）をエウローパとするものである<sup>28)</sup>。円盤陸地を左右（南北）に貫く横軸は、ナイル河（または紅海）とタナイス河とが直線でつながる水域帯であり、これに直交する水域帯が地中海である。T&O 地図は 9 世紀ごろから普及し、「中世ヨーロッパ」の世界像の様式となった<sup>29)</sup>。

1300 年ごろ作成されたイングランドのヘレフォード *Hereford* 大聖堂に現存する世界地図は、進化した T&O 地図というべきもので、中世の地理学的認識と宗教的想像力との複合の産物といわれる。ヘレフォード図には各地に説明文が記入され、これを詳細に紹介したのが応地である<sup>30)</sup>。かれによれば、エーゲ海と黒海を結ぶ「ヘレスポントゥス・マラマラ海・ボスポラス海峡」にかかる記入が、エウローパとアジアの境に触れていないようである。これをどのように理解したらよいか。

ヘレフォード地図が作成されたのが 1300 年ごろならば、それは 13 世紀後半の情勢を反映しているはずである。アナトリアで東西両勢力が睨みあう時代背景のもとで、ヘレフォード地図が作成されたことになる。エウローパがキリスト教世界の大陸とみなされていたならば、アナトリアの西半分がキリスト教世界に属していた 13 世紀末に、バルカン半島とアナトリアの間の水域帯で大陸を分けることに、神学的世界観にとり意味があったとは考えられない。しかも、キリスト教的世界像においてエルサレムが世界の中心に位置するならば、エルサレムの西、地中海の北の地域はすべてエウローパとされて当然である。ヘレフォード地図でエルサレムが中心となり、エウローパ・アフリカの中心はローマだった<sup>31)</sup>。

そうであれば、アナトリアがエウローパの一部とされてもおかしくない。事実、そのような事例が存在する。1581 年にハノーファで出版された旅行記に載った理念的な世界図で、エルサレムを中心にした三つ葉のクローバ状に分かれた三大陸のうちで、*EVROPA* のなかにトルコ *Türckey* が記入されているからである<sup>32)</sup>。オスマン帝国がハンガリーまで領域を拡大した 16 世紀後半に、トルコを「ヨーロッパ」大陸内に位

28) 旧約聖書「創世記」第 10 章の新しい口語訳は、「箱舟から出たノアの子らは、セム、カム、ヤフェトであった。カムはカナン之父である。この三人は、ノアの子らで、この人たちから全地に人類が広がった。」とあり、大陸名には触れていない。フェデリコ・バルバロ訳注『旧約聖書 天地創造：創生の書』講談社学術文庫、2011 年、57 ページ。ここではハム *Ham* がカムと表記されている。ヴァーガ他は、ヒエロニムス（347 ごろ～420）がヘブライ語聖書からのラテン語訳で、アジア、アフリカ、ヨーロッパという大陸名を付け加えたとしている。前掲書、229–230 ページ。

29) 応地、前掲書、72–73 ページ。

30) 同上書、68–138 ページ。ヴァーガ他、前掲書、239–240 ページも参照。

31) 「ヘレフォード図は聖墳墓教会を、円形都市エルサレムの中心、キリスト教世界の中心、さらに円形地図の中心として描く。」応地、同上書、116 ページ。

32) ヴァーガ他、前掲書、20–21 ページ。

置づけた事例は、貴重な時代の証言というべきである。

地図史の以上の概観から判るように、「中世ヨーロッパ」で T&O 地図により「エウローパ」という地名が教会内部に保存されたとはいえ、これはあくまで神学的世界像における抽象的広域観念にすぎなかった。プトレマイオス図が普及するまで、「ヨーロッパ」という観念が広く根をおろしていたとは考えられない<sup>33)</sup>。

#### 2-4 大航海時代、「ヨーロッパ」の誕生

以上の検討から、「エウローパ」という東方産の他称が、それまでの自称である「キリスト教世界」に代り、自称になりはじめたのは、おそらく 15 世紀のプトレマイオス地図の再発見から 16 世紀半のメルカトル地図の出現までの 1 世紀半の間と推定することができるであろう。

この問題を真正面からとりあげたのがフェーブルである。かれはコミーヌ *Philippe de Commyne* とシュリ *duc de Sully* (1559~1641) の名を挙げる。コミーヌは『回想録』(1474~83) のなかで、ヨーロッパという観念を日常的に、普通に、近代的な意味で使っているという<sup>34)</sup>。シュリについては、アンリ四世 (在位 1589~1610) が死の直前の 1610 年に書いた「大計画」*Grand Dessein* を紹介する形をとる『王室財政に関する覚書』が、「ヨーロッパという語で満ちているが・・・キリスト教世界という観念から、ヨーロッパという観念を解き放っていない。広まり始めているヨーロッパという若い観念と、キリスト教世界という古い伝統的観念を並置し、結び合わせている」と、紹介している<sup>35)</sup>。

古い地理学用語であるエウローパが復活した原因として、フェーブルは四点を挙げる。地理学に対する関心が高まった、アメリカ大陸の発見で、新大陸に等置される旧大陸の名が必要になった、イエズス会の学校が 16 世紀末以来、各国の中産階級の青少年に古代の観念を提供した、宗教改革以降キリスト教世界が引き裂かれたため、中立的な共通の呼称が必要になった<sup>36)</sup>。

デイヴィスが強調するのはキリスト教世界の分裂である。16 世紀の宗教改革によって惹き起された教会分裂が、「キリスト教世界」の統一性を修復不可能なまでに弱めてしまったために、とくにウェストファリア条約以降、「キリスト教世界」から「ヨーロッパ」への名称移行が進んだという<sup>37)</sup>。これはもっともらしい説明に聞こえる。

33) 「プトレマイオスの業績が西洋に再び表れた 15 世紀初期に、ヨーロッパは、ほどなく共通の統一された言語となった地図学の技術と科学によって公式化され、定義された。」ヴァーガ他、前掲書、103 ページ。この断定は性急に過ぎるのではないか。

34) フェーブル、181 ページ。

35) 同上書、216 ページ。

36) 同上書、208-210 ページ。

37) デイヴィス、前掲書、I 37-38, II 350, 479 ページ。



しかし、1054年の東西教会の分裂によってキリスト教世界の統一性がすでに失われていたことを考えれば、なぜ11世紀に「ヨーロッパ」という名称に変わらなかったのか、また「キリスト教世界」の代替用語としてなぜ「ヨーロッパ」が選ばれたのかという、疑問が残る。「西洋」*Occidens*<sup>38)</sup>、「ラテン世界」*Latinitas*、「フランク世界」*Francia*<sup>39)</sup>も候補になりえただろうからである。16世紀の「キリスト教世界」の分裂は、「ヨーロッパ」という地名の一般化にとって必要条件にすぎず、けっして十分条件ではない。フェブルはデイヴィスほど単純でないが、地理学的認識の拡大の意義を追究しきれていない。

そこで、わたくしは15/16世紀が「大航海時代」であったことに眼を向けよう。1453年のコンスタンティノポリス陥落に続くオスマン帝国の西進により、15世紀後半「キリスト教世界」はユーラシア大陸の西北の隅に追い詰められた。それでも1492年のレコンキスタ達成（グラナダ陥落）によるイベリア半島奪回は、「キリスト教世界」に西方海上への脱出準備を整える余裕をもたらした。「エウローパ大陸」から押し出される形で始まった「キリスト教世界」の大洋進出（脱地中海）は、航海と海戦の分野で技術革新を生み出し、その成果は、とりわけ「キリスト教世界」の逃げ場となった「新世界」において、絶大な威力を発揮した。大西洋を新しい地中海とした「キリスト教世界」は、「新世界」の搾取により態勢を立て直し、イスラーム世界への反撃のきっかけを掴むことができたのである<sup>40)</sup>。

バスコ・ダ・ガマのインド到着4年後の1502年にポルトガルで製作されたカンティーノ地図は、アメリカ大陸東部から東南アジアにいたる範囲を測量に基づいて作図した、最初の世界地図であったといわれる<sup>41)</sup>。1569年出版のメルカトル世界地図が何よりも海図に適したことは、「大航海時代」が盛期を迎えた時代背景のもとで、地図作成の技術革新が起きたことを物語る。1538年、初めて南半球図を作成して、南北アメリカの大陸名を記入したのもメルカトルであったことを見落してなるまい。

38) 宗教的中立性を重視するならば、東方の異教徒の名に由来するエウローパ対アジアでなく、オッキデンス *Occidens* 対オリエンス *Oriens*の方がより中立的で表象も明瞭な対語であっただろうに。

39) 「外部から見た場合、ヨーロッパの住民はすべて「フランク人」だと見なされるほどであった。」ポミアン、前掲書、86ページ。「ムスリムでシリア人の・・・ウサーマ・イブン・ムンキド(1095～1188)にとって、ヨーロッパ人は皆フランク人であった。」ヴァーガ他、前掲書、69ページ。応地利明教授のご教示によれば、アラビア語で「ヨーロッパ」をイフランジャと呼ぶそうである。これは *Francia* に由来する。イスラーム世界が、カロリング朝フランク帝国をキリスト教世界の原型と観たのはもっともなことである。

40) モンテスキューはいう。「アメリカ大陸発見の効果は、ヨーロッパ、アジア、アフリカを結びつけたことである。アメリカはヨーロッパに、東インドと呼ばれたアジアのあの広大な部分との商業のために物資を供給した。・・・それ[アフリカ]はアメリカの[銀]鉱山や農地での労働のための人員を供給した。」野田良之他訳『法の精神』岩波文庫、1989年、中、289ページ。

41) 応地、前掲書、188ページ以下。



ここで「大航海時代」が「キリスト教世界」に及ぼした反作用を検討しよう。

第一に、メルカトル地図が海図としての利用価値を発揮した反面、高緯度の陸地面積を過大に上げたことである<sup>42)</sup>。製作者の意図せざる「ヨーロッパ」の拡張効果だが、結果として「ヨーロッパ」を大陸とすることを正当化し、近代地理学の発展にも拘らず、古代ギリシャ伝来の三大陸観に固執する根拠を与えたことは疑いをいれない。これ以降、今日にいたるまで、ヨーロッパは自らを「大陸」とする特権を手放そうとしない。そのため、自然地理学では単一の「ユーラシア大陸」(アシローパ大陸と呼ぶ方がまだましであろうに)上に、人文地理学では「アジア大陸」と「ヨーロッパ大陸」の両大陸が並存するという奇妙な二重大陸観念が、現代の世界像をも刻印しているのである<sup>43)</sup>。

第二に、「大航海時代」は地球周航という成果を生み、地球が球体であることを経験的事実として人々に実感させた。それは「キリスト教世界」に、自らを平面でなく球体面の中心に位置づけ直す必要を迫ったはずである。地中海とその支海である黒海が「われらの海」*mare nostrum*にとどまるかぎり、ローマまたはコンスタンティノポリスに世界図の中心点を打つことができた。しかし、「キリスト教世界」が西方に新しい大陸を「発見」したいま、自らの中心性を誇示するにはどうすればよいのか。北を天にしてアジア、アフリカ、アメリカ三大陸の要に自らを置くほかあるまい。しかも、世界の中心に位置する以上、「キリスト教世界」はどれほど小さかろうとれっきとした大陸性を帯びなければならないのだ<sup>44)</sup>。

第三に、「キリスト教世界」という自称は、異教世界に囲まれている現実を追認し、固定化するばかりか、自らを相対化する恐れがある。それでは、ほかに何があるか。「フランキア」と名乗ることは、すでにフランスがこの名称を継いでいるので、ゲルマン系諸国が認めないだろう。「エウローパ」であれば、中立的な大陸名として使われてきた伝統的用語法のおかげで、内部対立を隠蔽する抽象的の共通性を表すのにも適している。しかも、古代ギリシャ・ローマ世界との歴史的連続性を誇示しようとあれば、なおのことである。

かくして、「ヨーロッパ」の大陸観、中心説、自称化、この三者が一体となり、15/16世紀に「ヨーロッパ」という名称が受け入れられたのである。プトレマイオスの天動説からコペルニクスの地動説への大転回が起きたそのときに、地上では「ヨーロッ

42) 北ヨーロッパの面積は3.5倍に拡大される。ロビンソン他、前掲書、62ページ。

43) これを示す一例が近代オリンピックである。五輪旗が表す五大陸とは、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカ、オーストラリアである。ヨーロッパ半島(あるいはせいぜい亜大陸)が「大陸」に拡張される一方で、南北アメリカは単一大陸に圧縮されているのだ。

44) 「大航海時代がヨーロッパ中心の世界観を生みだした。それにはヨーロッパを強大な大陸であることを認めることが絶対的に必要なのであった。」ヴァーガ他、前掲書、103ページ。

パ」という不動の地軸を中心に世界が回る「天動説」が生まれたことになる。ピレンヌがいうように、「マホメットなくしてはカール大帝の出現は考えられない」<sup>45)</sup>とするならば、オスマン帝国なくしては「ヨーロッパ」の出現は考えられない、ということになるだろうか。

それだけではない。「大航海時代」は「ヨーロッパ」と日本の出会いももたらしたのである。

### 3 わたくしたちは「ヨーロッパ」をどのように捉え直すか

#### 3-1 日本と「ヨーロッパ」の出会い

天文 12 年、1543 年は、西方世界では臨終の床にあったコペルニクスの許に刷りあがったばかりの『天球の回転について』が届けられ、東方世界ではポルトガル船が種子島に漂着して鉄砲を伝え、もって日本と「ヨーロッパ」、二つの世界が出会った年である。それから半世紀も経たない 1585 年に、イエズス会士ルイス・フロイス *Luis Frois* (1532~97) が日本と「ヨーロッパ」の異同を論じるまでにいたった<sup>46)</sup>。「ヨーロッパ」という自称が遅くとも 16 世紀末には普及していたことは、かれがポルトガル語で、日本人と「ヨーロッパ人」とを比較していることから確かめられる<sup>47)</sup>。対抗宗教改革の先陣を切って異教の地で布教活動を展開したイエズス会士が、クリスタンダディ *cristandade* (キリスト教世界) を名乗ることができなかったことに、宗教的不寛容の孕む矛盾が露呈しているといえないか。

ここで注目されるのは、かれが偏見や先入観にさほどとらわれずに日本人を観察していることよりも、「ヨーロッパ人」によって日本人が観察の対象になったこと自体である。フロイス以来 400 年以上続く、相互認識における能動の「ヨーロッパ」対受動の日本という一方方向の図式が定まったからである。

#### 3-2 類型論による西ヨーロッパ解釈

以上の検討から日本人の解釈対象として現実的意味を持つ「ヨーロッパ」とは、16 世紀以降の西ヨーロッパにほかならないことが導きだされる。いまや「ヨーロッパ」と自称し、日本と関係を持つにいたった西ヨーロッパ、これこそ本稿副題の「空間の

45) ピレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生』、335 ページ。

46) ルイス・フロイス著・岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波文庫、1991 年。長いポルトガル語原題の後尾は、・・・ *a gente de Europa e esta provincia de Japão* となっている。

47) フロイスは自称にかかる用語として、「われわれ」、「ヨーロッパ人」、「ヨーロッパの人々」、「ヨーロッパで」を使用している。「ヨーロッパ」が地名であるとともに、地域住民の総体としての民族の名ともなっていることは明らかである。

類型」が含意するものである。それでは西ヨーロッパをどのように捉えるか、その方法として有効なのが類型論であろうとわたくしは考える。

西ヨーロッパは、類型特性の生成過程としての本源的蓄積期の最終過程、産業革命を経て、19世紀初めまでに類 *genus* としての型を確定した。いまや西ヨーロッパ内部の地域差は種差 *differentia specifica* とみなされる。類型特性は、同位の類との対比によってのみ意味を持つので、北アメリカ、日本と対比する形で西ヨーロッパの類型特性をまとめてみたのが附表である<sup>48)</sup>。

植民地物産による商品革命と本源的蓄積の最早終了(最初の産業革命)をもって地球規模の資本制経済体制形成の起点となったことが、西ヨーロッパに固有な歴史的初期条件である。これは西ヨーロッパに類型的危機の種も蒔いた。植民地物産の流入による消費財体系の転換は19世紀半ばまでに終り、固有の消費様式が完成したため、完成度の高い消費様式が生産力上昇にともなう供給増大に対応する需要増大を妨げるにいたったからである。消費財部門における需給関係の構造的不均衡という類型的危機は、供給者に「どのようにして売るか」を基本関心として植えつける。しかし、内需深化のための努力を尽くしても需要不足の解決にいたらず、最終的に外部需要に頼るほかない。かくて先鋭な輸出志向を秘める西ヨーロッパ企業の貿易行動は、「西ヨーロッパ文明」の絶対優位を競争優位の武器とするために自らの消費様式を鎧う結果を招き、それが内需の硬直化を再生産する。こうして生まれる因果循環が西ヨーロッパの類型特性を刻印する。

かくして西ヨーロッパ人は、おしなべて「市場人」*homo mercator* となった。西ヨーロッパ人とは何よりも商人なのだ<sup>49)</sup>。文化附着の商品の輸出商人の自負は、古代ギリシャ・ローマ文明遺産の独占的相続人であるとの自意識を拠りどころにする<sup>50)</sup>。それどころか、西ヨーロッパは自らの始祖としていわゆる「古典古代」文明を創りだしたと、いうことさえできるであろう。ギリシャ神話が植民都市国家ギリシャの自己認識を正当化したように、西ヨーロッパは、古代ギリシャからの連続性という「ヨーロッパ神話」を紡ぎながら、自己文明化の努力を続けてきた。自称化した「ヨーロッパ」を、西ヨーロッパという新しい他称をもって認識対象に据えなおすこと、わたくしたちの課題はこれである。

48) 詳しくは、わたくしの論考「資本循環と資本類型 - 経済政策類型論構築のために -」『京都大学経済学会・経済論叢』第157巻第1号、平成8年1月、および「資本の諸類型 - わたくしたちは「西洋」をどのように捉え直すか -」『東経大会誌』262号、2009年、を参照されたい。

49) ドイツ経済史における商業、商人の意義について、わたくしの「ファブリカントとカオフマン - 産業革命期ニダーラインの商人たち -」『追手門経済論集』第41巻第1号、平成18年1月、を参照されたい。

50) 「東洋文化に見られないヨーロッパ文化の著しい特色は、すべてギリシアから生まれ出たものである。」ドーソン、前掲書、4ページ。

## 資本体制の三類型　－日本、西欧、北米－

初期条件		日 本	西 欧	北 米
		強制開国，本源的蓄積の 強いられた方向転換	植民地物産と商品革命 本源的蓄積の最早終了	入植，原住民駆逐 独立革命，大自営農
理論的 属性	資本循環形態 類型的危機形態 基本規定 基本関心 再生産の必然性 再生産の指向性 利潤関心 経済人類型 (homo oeconomicus)	生産資本循環 生産要素の不適合 生産の優位 どのようにして作るか 有 弱 弱 工場人 (homo fabricator)	商品資本循環 内部市場飽和 販売の優位 どのようにして売るか 有 強 中位 市場人 (homo mercator)	貨幣資本循環 投資先の不確定性 投資の優位 なにを作るか 無 弱 強 投機人 (homo speculator)
歴史的 属性	歴史的産業連関 資本間関係 労働様式 消費様式 内部市場 輸出依存度 空間原像 外界形態 内外関係 経済時間	不連続・他律性 協調 協業 他律的変動 伸縮 低 工場 資源供給源 受動的開放系 不連続・短期	連続・後方連関効果 協調 独業 安定 硬直 高 市場 販路 能動的開放系 連続・長期	不連続・前方連関効果 敵対 独業 自律的変動 伸縮 低 農場 未開拓地 <i>frontier</i> 防御的拡大系 不連続・短期
政策的 属性	社会的対立因 帰属集団 資本・公権力関係 公権力形態 政策目標　対企業 対世帯 対外界	世代差 臣民/国民 密着 行政の優位（事中） 産業編成指揮 消費過程変換誘導 環境変動順応	階級差 市民 <i>citizen</i> 親和 立法の優位（事前） 市場基盤拡充 階級秩序維持 文化優位の確保	人種差 人民 <i>people</i> 対立 司法の優位（事後） 独占規制 消費の自由の保障 国家安全保障

出所：渡辺尚「資本循環と資本類型 - 経済政策類型論の構築のために - 」『京都大学経済学会・経済論叢』第 157 巻第 1 号 (平成 8 年 1 月)，27 ページ。ただし原表に修正を施した。

[謝辞] 本稿は，平成 23 年 10 月 17 日に開催された，海外事情研究所 2011 年度第 1 回研究会での報告の原稿に手を入れたものです。得がたい機会をご恵くださった幸田亮一教授，過分なご紹介を賜った酒井重喜経済学部長はじめ，貴重なご意見を賜った参会者の皆様に篤く御礼を申し上げます。

## Historical Space of European Economy - Remembrance of Civilization and Typology of Economic Space -

Hisashi WATANABE

The subject of this paper has been induced from two questions: how do *Europeans* define *Europe* and how meaningfully can we, the Japanese, define *Europe*.

There are three issues for this subject: if *Europe* is the concept of geographical area or that of race, when and on which occasion did *Europeans* begin to call themselves *Europeans* and if *Europe* was originally self-naming or passive naming by others.

Although the terminology of *Europe* as the name of a continent was established already in ancient Greece, it was forgotten in the West through the Middle Ages and it called itself *Christianitas* (*Christianity*). At long last, from the latter half of the 15th century, namely in the Age of Great Voyages, the term *Europe* spread gradually and until the end of the 17th century replaced *Christianity*. Well, self-naming, Eurocentric idea and Euro-continental concept made up a triangular complex. In this meaning *Europe proper* was born at the dawn of the Modern Age and since then it has endeavored to legitimize its own cultural supremacy over other worlds by demonstration of so-called continuity from the classical Greek civilization.

The year of 1543 was a moment of the modern world history, because the epoch-making work of Copernican heliocentric system was published and a Portuguese ship came to Japan, which was the very first encounter of *Europe* and Japan. It is a matter of utmost concern to us, therefore, to conceptualize *Europe proper* after the 15th century from our own standpoint. For this purpose the typological method may probably be useful. It is our task to grasp *Europe proper*, *Western Europe*, as a genus of capitalistic economic systems in comparison with *Japan* and *North America* as the other genera.